

未来への伝承

報告書「土浦の人と暮らしの戦中・戦後」

「記憶で振り返る戦争の時代」

アジア・太平洋戦争の終結から70年余りが過ぎ、戦争の記憶の風化が叫ばれて久しくなりました。戦争の話聞いたことがない、戦争中の土浦がどのような町であったか知らないという方もいらっしゃるのではないのでしょうか。そんな方にぜひ読んでいただきたいのがこの報告書です。

博物館では、戦後70年にあたる平成27年に、「市民の記憶」収集事業を開始しました。この事業では、土浦に住んでいる方、あるいは住んでいた方から、戦中・戦後の体験文を寄せていただき、同時に直接お話を聞いてまいりました。そして本年3月、その集大成として『市民の記憶』収集事業報告書 土浦の人と暮らしの戦中・戦後』を刊行いたしました。

この報告書には、霞ヶ浦海軍航空隊と土浦海軍航空隊、国民学校、土浦への疎開、空襲、従軍経験、勤労動員、満州移民と引揚げ、戦後入植のほか、戦中・戦後の人と暮らしにかかわる記憶が記された60余編の体験文を収録しました。

海軍飛行予科練習生として厳しい訓練を積んだにもかかわらず、終戦を知らせるラジオ放送を聞いて愕然としたこと、教員として児童の教育に身を捧げたが、戦後は教育の方針が戦中とは変わってしまつて戸惑ったこと、土浦に集団疎開し、ホームシックになつて皆で泣いたことなど、戦中・戦後の様々な記憶が語られています。

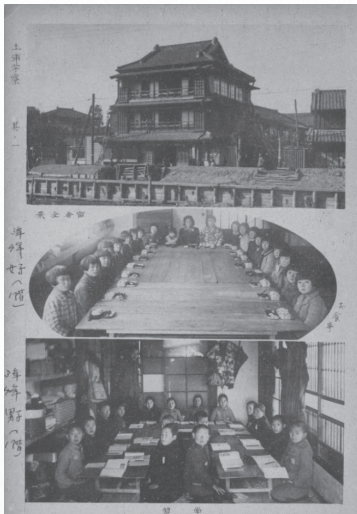
土浦高等女学校(現土浦第二高等学校)に在籍し

ながら第一海軍航空廠しょうに動員された女学生の日記や、終戦後にシベリアで抑留された方が残したスケッチなど、当時の生々しい実態がうかがえる資料も収録しました。

女学生の日記からは、「動員学徒として」「頑張ろう」と自らを鼓舞しつつも、学校へ行けずに働くという現実に対してやるせない思いを抱いていた様子をうかがうことができ、学業半ばで動員された女学生の仕事・学校・家族に対する心情を垣間見ることが出来ます。

また、抑留中の体験を帰国後に描いたスケッチには、前後がわからないほど真っ黒で、三か月も風呂に入らず、ひげも一年以上剃らなかつた様子や、何度も生命の危機を感じたことなど、過酷な抑留生活の様子が記されています。

記憶は、習俗・風習などと同様、残す努力をし



▲疎开学童の様子(上は、疎开学童が寝泊まりに使った旅館・土浦館)



▲シベリアで抑留された方が残したスケッチ

なければ風化し、消えていってしまいます。戦中・戦後の困難な時代を生き抜いた先人の記憶を記録しておくことは、現代の土浦に生き、未来を見据える我々や子供たちにとって、苦闘の足跡を知り、先人の功績を学ぶことにつながります。記憶という生の声を記録したこの報告書は、無形の資料の集成でもあります。

博物館では今回集めた記憶を後世に伝えるとともに、土浦市の重要な資料であること、ひいては地域の宝であることも伝えてまいります。

なお、博物館では5月6日(月)まで、第40回特別展「町の記憶―空都土浦とその時代」を開催し、今回ご紹介した女学生の日記や抑留体験のスケッチも展示しています。報告書とあわせて、ぜひご覧ください。

岡市立博物館(☎824・2928)